

婦人科結果報告書の見方

✧ 子宮

子宮がんには、子宮の入り口部にできる子宮頸がんと、奥の部分にできる子宮体がんの2種類があります。当健診センターでは、子宮頸がん検診を行っています。子宮頸がんは、20歳代の若年層で急激に増えてきています。症状はほとんどありませんので検診を受け、早期発見・早期治療をすることが大切です。不正出血がある場合は、子宮体がんの可能性があるので、お近くの婦人科を受診してください。

◆ 頸部細胞診

子宮頸部や内膜の細胞をブラシなどでこすって採取し、顕微鏡でがん細胞の有無や種類を調べます。

◆ HPV 検査ハイリスク型

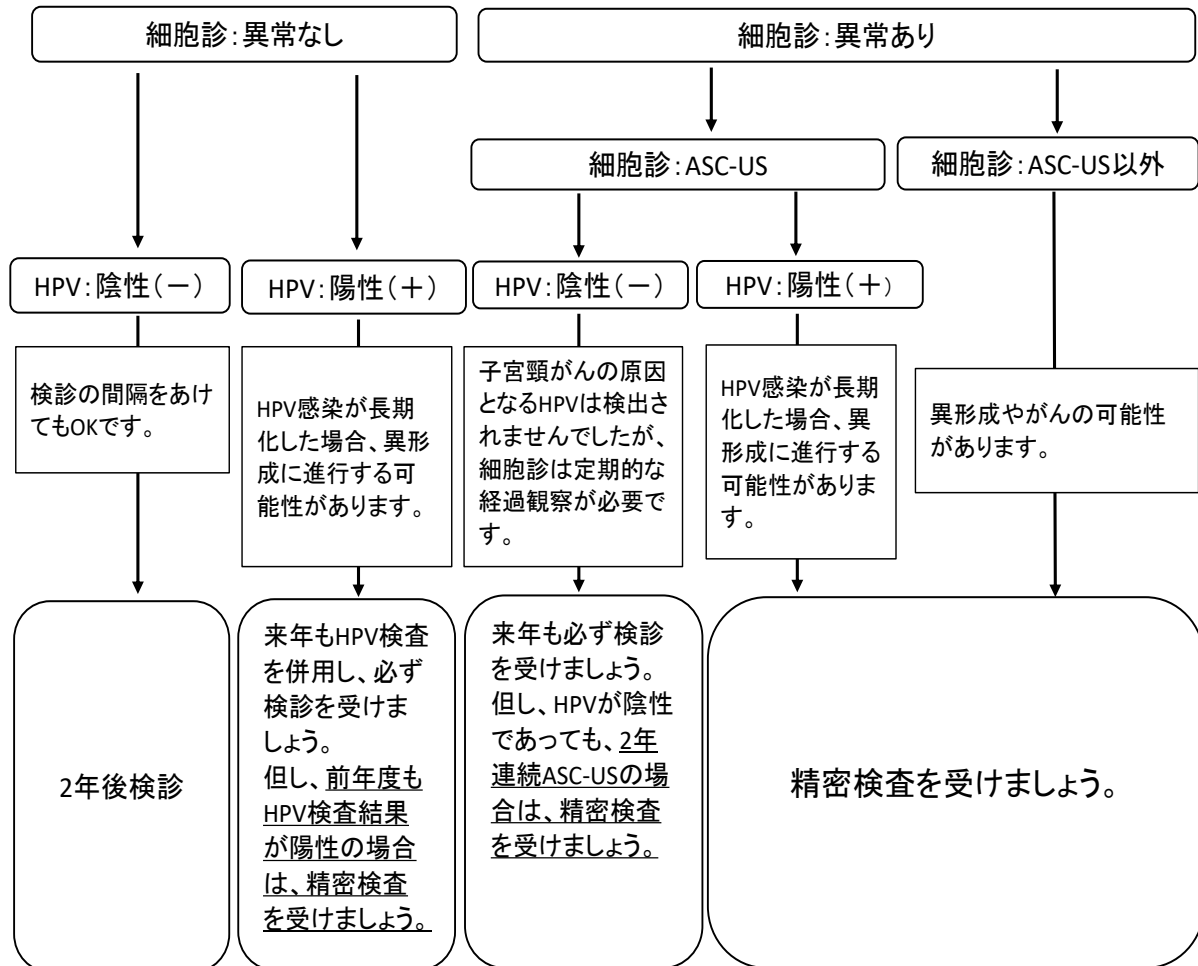
子宮頸部の粘膜から直接細胞を採取し、子宮頸がんを誘発する可能性のあるHPV（ヒトパピローマウィルス）の感染の有無を検査します。子宮頸がんを発見する検査ではありませんが、定期的に検査することで子宮頸がんになるリスクをある程度予測することができます。子宮頸がん検診（細胞診）と、ハイリスクHPV検査の結果を合わせて今後のリスクについて総合評価をします。

◆ 内診

子宮、卵巣、膣などを医師が視診、触診します。

検査結果からわかる今後のがんの危険性

子宮頸がん検診（細胞診）とハイリスクHPV検査の結果をあわせて、今後のがんになるリスクについて総合評価を行います。



◆ 経腔超音波検査（オプション検査）

腹部超音波検査より観察したい臓器までの距離が近いのでより鮮明に観察できます。子宮筋腫や内膜症といった子宮の疾患や、卵巣嚢腫などの付属器疾患を発見することが可能です。

【主な所見】

子宮筋腫	子宮にできる良性の腫瘍で、月経過多、貧血、下腹部痛、腰痛などの症状を伴うことがあります。
付属器腫瘍	主に卵巣の腫瘍を言い、良性のものと悪性のものがあります。鑑別のために、精密検査が必要になります。
子宮頸管ポリープ	子宮頸管粘膜がいぼのように盛り上がっているものです。不正出血の原因になることもあります。
腔部びらん	女性ホルモンの影響により子宮口が赤くただれた様に見えるものです。思春期から閉経まで存在する生理的な変化で病気ではありません。
萎縮性腔炎	卵巣からのホルモン減少により腔が萎縮し、炎症が起こった状態です。
カンジダ腔炎	真菌の一種、カンジダが腔内で増殖することにより起こり、強い痒みを伴うことがあります。
トリコモナス腔炎	トリコモナスという小さな原虫により起こります。おりものが多くかゆみもあり再発しますので、パートナーと共に治療が必要です。